漫之道 日语学习系列

最新日语能力全真模拟

さいしんにほんごのうりょくしけんもぎテスト

（下册）读解篇1–2级

编著 王 欣
吴毓华
审校 松尾善弘

四川大学出版社

課外読み物：

報恩記

わたしは甚内（じんない）と云うものです。苗字（みょうじ）は——さあ、世間ではずっと前から、阿媽港甚内（あまかわじんない）と云っているようです。阿媽港甚内、——あなたもこの名は知っていますか？　いや、驚くには及びません。わたしはあなたの知っている通り、評判の高い盗人（ぬすびと）です。しかし今夜参ったのは、盗みにはいったのではありません。どうかそれだけは安心して下さい。

あなたは日本（にほん）にいる伴天連（ばてれん）の中でも、道徳の高い人だと聞いています。して見れば盗人と名のついたものと、しばらくでも一しょにいると云う事は、愉快ではないかも知れません。が、わたしも思いのほか、盗みばかりしてもいないのです。いつぞや聚楽（じゅらく）の御殿（ごてん）へ召された呂宋助左衛門（るそんすけざえもん）の手代（てだい）の一人も、確か甚内と名乗っていました。また利休居士（りきゅうこじ）の珍重（ちんちょう）していた「赤がしら」と称える水さしも、それを贈った連歌師（れんがし）の本名（ほんみょう）は、甚内（じんない）とか云ったと聞いています。そう云えばつい二三年以前、阿媽港日記（あまかわにっき）と云う本を書いた一大村（おおむら）あたりの通辞（つうじ）の名前も、甚内と云うのではなかったでしょうか？　そのほか三条河原（さんじょうがわら）の喧嘩に、甲比丹（カピタン）「まるどなど」を救った虚無僧（こむそう）、堺（さかい）の妙国寺（みょうこくじ）門前に、南蛮（なんばん）の薬を売っていた商人、……そう云うものも名前を明かせば、何がし甚内だったのに違いありません。いや、それよりも大事なのは、去年この「さん・ふらんしすこ」の御寺（みてら）へ、おん母「まりや」の爪を収めた、黄金（おうごん）の舎利塔（しゃりとう）を献じているのも、やはり甚内と云う信徒だった筈です。

しかし今夜は残念ながら、一々そう云う行状を話している暇はありません。ただどうか阿媽港甚内（あまかわじんない）は、世間一般の人間と余り変りのない事を信じて下さい。そうですか？　では出来るだけ手短かに、わたしの用向きを述べる事にしましょう。わたしはある男の魂のために、「みさ」の御祈りを願いに来たのです。いや、わたしの血縁のものではありません。と云ってもまたわたしの刃金（はがね）に、血を塗ったものでもないのです。名前ですか？　名前は、——さあ、それは明かして好（い）いかどうか、わたしにも判断はつきません。ある男の魂のために、——あるいは「ぽうろ」と云う日本人のために、冥福（めいふく）を祈ってやりたいのです。いけませんか？——なるほど阿媽港甚内に、こう云う事を頼まれたのでは、手軽に受合う気にもなれますまい。ではとにかく一通り、事情だけは話して見る事にしましょう。しかしそれには生死を問わず、他言（たごん）しない約束が必要です。あなたはその胸の十字架（くるす）に懸けても、きっと約束を守りますか？　いや、——失礼は赦（ゆる）して下さい。（微笑）伴天連（ばてれん）

のあなたを疑うのは、盗人（ぬすびと）のわたしには僭上（せんじょう）でしょう。しかしこの約束を守らなければ、（突然真面目（まじめ）に）「いんへるの」の猛火に焼かれずとも、現世（げんぜ）に罰（ばち）が下（くだ）る筈です。

もう二年あまり以前の話ですが、ちょうどある凩（こがらし）の真夜中です。わたしは雲水（うんすい）に姿を変えながら、京の町中（まちなか）をうろついていました。京の町中をうろついたのは、その夜（よ）に始まったのではありません。もうかれこれ五日ばかり、いつも初更（しょこう）を過ぎさえすれば、必ず人目に立たないように、そっと家々を窺（うかが）ったのです。勿論何のためだったかは、註を入れるにも及びますまい。殊にその頃は摩利伽（まりか）へでも、一時渡っているつもりでしたから、余計に金（かね）の入用もあったのです。

町は勿論とうの昔に人通りを絶っていましたが、星ばかりきらめいた空中には、小（お）やみもない風の音がどよめいています。わたしは暗い軒通（のきづた）いに、小川通（おがわどお）りを下（くだ）って来ると、ふと辻を一つ曲（まが）った所に、大きい角屋敷（かどやしき）のあるのを見つけました。これは京でも名を知られた、北条屋弥三右衛門（ほうじょうややそうえもん）の本宅です。同じ渡海（とかい）を渡世にしていても、北条屋は到底（とうてい）角倉（かどくら）などと肩を並べる事は出来ますまい。しかしとにかく沙室（しゃむろ）や呂宋（るそん）へ、船の一二艘（そう）も出しているのですから、一かどの分限者（ぶげんしゃ）には違いありません。わたしは何もこの家（うち）を目当に、うろついていたのではないのですが、ちょうどそこへ来合わせたのを幸い、一稼（ひとかせ）ぎする気を起しました。その上前にも云った通り、夜（よ）は深いし風も出ている、――わたしの商売にとりかかるのには、万事持って来いの寸法（すんぽう）です。わたしは路ばたの天水桶（てんすいおけ）の後（うしろ）に、網代（あじろ）の笠や杖を隠した上、たちまち高塀を乗り越えました。

世間の噂（うわさ）を聞いて御覧なさい。阿媽港甚内（あまかわじんない）は、忍術を使う、――誰でも皆そう云っています。しかしあなたは俗人のように、そんな事は本当と思いますまい。わたしは忍術も使わなければ、悪魔も味方にはしていないのです。ただ阿媽港（あまかわ）にいた時分、葡萄牙（ポルトガル）の船の医者に、究理の学問を教わりました。それを実地に役立てさえすれば、大きい錠前を（ね）じ切ったり、重い閂（かんぬき）を外したりするのは、格別むずかしい事ではありません。（微笑）今までにない盗みの仕方、――それも日本（にっぽん）と云う未開の土地は、十字架や鉄砲の渡来と同様、やはり西洋に教わったのです。

わたしは一ときとたたない内に、北条屋の家（うち）の中にはいっていました。が、暗い廊下（ろうか）をつき当ると、驚いた事にはこの夜更（よふ）けにも、まだ火影（ほかげ）のさしているばかりか、話し声のする小座敷があります。それがあたりの容子（ようす）では、どうしても茶室に違いありません。「凩（こがらし）の茶か」――わたしはそう苦笑（くしょう）しながら、そっとそこへ忍び寄りました。実際その時は人声のするのに、仕事の邪魔（じゃま）を思うよりも、数寄（すき）を凝らした囲いの中に、この家（や）の主人や客に来た仲間が、どんな風流を

楽しんでいるか？——そんな事に心が惹（ひ）かれたのです。
襖（ふすま）の外に身を寄せるが早いか、わたしの耳には思った通り、釜（かま）のたぎりがはいりました。が、その音がすると同時に、意外にも誰か話をしては、泣いている声が聞えるのです。誰か、——と云うよりもそれは二度と聞かずに、女だと云う事さえわかりました。こう云う大家（たいけ）の茶座敷に、真夜中女の泣いていると云うのは、どうせただ事ではありません。わたしは息をひそめたまま、幸い明いていた襖（ふすま）の隙（すき）から、茶室の中を覗（のぞ）きこみました。
行燈（あんどん）の光に照された、古色紙（こしきし）らしい床（とこ）の懸け物、懸け花入（はないれ）の霜菊（しもぎく）の花。——囲（かこ）いの中には御約束通り、物寂びた趣が漂っていました。その床の前、——ちょうどわたしの真正面（ましょうめん）に坐った老人は、主人の弥三右衛門（やそうえもん）でしょう、何か細（こま）かい唐草（からくさ）の羽織に、じっと両腕を組んだまま、ほとんどよそ眼に見たのでは、釜の煮（に）え音でも聞いているようです。弥三右衛門の下座（しもざ）には、品（ひん）の好（い）い笄髷（こうがいまげ）の老女が一人、これは横顔を見せたまま、時々涙を拭っていました。
「いくら不自由がないようでも、やはり苦労だけはあると見える。」——わたしはそう思いながら、自然と微笑を洩（も）らしたものです。微笑を、——こう云ってもそれは北条屋（ほうじょうや）夫婦に、悪意があったのではありません。わたしのように四十年間、悪名（あくみょう）ばかり負っているものには、他人の、——殊に幸福らしい他人の不幸は、自然と微笑を浮ばせるのです。（残酷な表情）その時もわたしは夫婦の歎きが、歌舞伎（かぶき）を見るように愉快だったのです。（皮肉な微笑）しかしこれはわたし一人に、限った事ではありますまい。誰にも好まれる草紙（そうし）と云えば、悲しい話にきまっているようです。
弥三右衛門はしばらくの後（のち）、吐息（といき）をするようにこう云いました。
「もうこの羽目（はめ）になった上は、泣いても喚（わめ）いても取返しはつかない。わたしは明日（あす）にも店のものに、暇（ひま）をやる事に決心をした。」
その時また烈しい風が、どっと茶室を揺（ゆ）すぶりました。それに声が紛（まぎ）れたのでしょう。弥三右衛門の内儀（ないぎ）の言葉は、何と云ったのだかわかりません。が、主人は頷（うなず）きながら、両手を膝の上に組み合せると、網代（あじろ）の天井へ眼を上げました。太い眉（まゆ）、尖った頬骨（ほおぼね）、殊に切れの長い目尻、——これは確かに見れば見るほど、いつか一度は会っている顔です。
「おん主（あるじ）、『えす・きりすと』様。何とぞ我々夫婦の心に、あなた様の御力を御恵み下さい。……」
弥三右衛門は眼を閉じたまま、御祈りの言葉を呟（つぶや）き始めました。老女もやはり夫のように天帝の加護を乞うているようです。わたしはその間（あいだ）瞬きもせず、弥三右衛門の顔を見続けました。するとまた凩（こがらし）の渡った

時、わたしの心に閃（ひらめ）いたのは、二十年以前の記憶です。わたしはこの記憶の中に、はっきり弥三右衛門の姿を捉（とら）えました。

その二十年以前の記憶と云うのは、——いや、それは話すには及びますまい。ただ手短に事実だけ云えば、わたしは阿嫣港（あまかわ）に渡っていた時、ある日本（にほん）の船頭に危（あやう）い命を助けて貰いました。その時は互に名乗りもせず、それなり別れてしまいましたが、今わたしの見た弥三右衛門は、当年の船頭に違いないのです。わたしは奇遇（きぐう）に驚きながら、やはりこの老人の顔を見守っていました。そう云えば威（い）かつい肩のあたりや、指節（ゆびふし）の太い手の恰好（かっこう）には、未（いまだ）に珊瑚礁（さんごしょう）の潮（しお）けむりや、白檀山（びゃくだんやま）の匂いがしみているようです。

弥三右衛門は長い御祈りを終ると、静かに老女へこう云いました。

「跡はただ何事も、天主（てんしゅ）の御意（ぎょい）次第と思うたが好（よ）い。——では釜のたぎっているのを幸い、茶でも一つ立てて貰おうか？」

しかし老女は今更のように、こみ上げる涙を堪（こら）えるように、消え入りそうな返事をしました。

「はい。——それでもまだ悔（く）やしいのは、——」

「さあ、それが愚痴（ぐち）と云うものじゃ。北条丸（ほうじょうまる）の沈んだのも、抛（な）げ銀（ぎん）の皆倒れたのも、——」

「いえ、そんな事ではございません。せめては倅（せがれ）の弥三郎（やさぶろう）でも、いてくれればと思うのでございますが、……」

わたしはこの話を聞いている内に、もう一度微笑が浮んで来ました。が、今度は北条屋（ほうじょうや）の不運に、愉快を感じたのではありません。「昔の恩を返す時が来た」——そう思う事が嬉しかったのです。わたしにも、御尋ね者の阿嫣港甚内（あまかわじんない）にも、立派（りっぱ）に恩返しが出来る愉快さは、——いや、この愉快さを知るものは、わたしのほかにはありますまい。（皮肉に）世間の善人は可哀そうです。何一つ悪事を働かない代りに、どのくらい善行を施（ほどこ）した時には、嬉しい心もちになるものか、——そんな事も碌（ろく）には知らないのですから。

「何、ああ云う人でなしは、居らぬだけにまだしも仕合せなぐらいじゃ。……」

弥三右衛門は苦々（にがにが）しそうに、行燈（あんどん）へ眼を外（そ）らせました。

「あいつが使いおった金でもあれば、今度も急場だけは凌（しの）げたかも知れぬ。それを思えば勘当（かんどう）したのは、……」

弥三右衛門はこう云ったなり、驚いたようにわたしを眺めました。これは驚いたのも無理はありません。わたしはその時声もかけずに、堺（さかい）の襖（ふすま）を明けたのですから。——しかもわたしの身なりと云えば、雲水（うんすい）に姿をやつした上、網代（あじろ）の笠を脱いだ代りに、南蛮頭巾（なんばんずきん）をかぶっていたのですから。

「誰だ、おぬしは？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

弥三右衛門は年はとっていても、咄嗟（とっさ）に膝を起しました。
「いや、御驚きになるには及びません。わたしは阿媽港甚内と云うものです。――まあ、御静かになすって下さい。阿媽港甚内は盗人（ぬすびと）ですが、今夜突然参上したのは、少しほかにも訣（わけ）があるのです。――」
わたしは頭巾（ずきん）を脱ぎながら、弥三右衛門の前に坐りました。
その後（のち）の事は話さずとも、あなたには推察出来るでしょう。わたしは北条屋（ほうじょうや）の危急（ききゅう）を救うために、三日と云う日限（にちげん）を一日も違えず、六千貫の金（かね）を調達する、恩返しの約束を結んだのです。――おや、誰か戸の外に、足音が聞えるではありませんか？　では今夜は御免下さい。いずれ明日（あす）か明後日（あさって）の夜（よる）、もう一度ここへ忍（しの）んで来ます。あの大十字架（おおくるす）の星の光は阿媽港（あまかわ）の空には輝いていても、日本（にっぽん）の空には見られません。わたしもちょうどああ云うように日本では姿を晦（くら）ませていないと、今夜「みさ」を願いに来た、「ぽうろ」の魂のためにもすまないのです。
何、わたしの逃げ途（みち）ですか？　そんな事は心配に及びません。この高い天窓（てんまど）からでも、あの大きい暖炉（だんろ）からでも、自由自在に出て行かれます。ついてはどうか呉々（くれぐれ）も、恩人「ぽうろ」の魂のために、一切他言（たごん）は慎（つつし）んで下さい。

北条屋弥三右衛門の話

伴天連（ばてれん）様。どうかわたしの懺悔（ざんげ）を御聞き下さい。御承知でも御座いましょうが、この頃世上に噂の高い、阿媽港甚内（あまかわじんない）と云う盗人（ぬすびと）がございます。根来寺（ねごろでら）の塔に住んでいたのも、殺生関白（せっしょうかんぱく）の太刀（たち）を盗んだのも、また遠い海の外（そと）では、呂宋（るそん）の太守を襲ったのも、皆あの男だとか聞き及びました。それがとうとう搦（から）めとられた上、今度一条戻（もど）り橋（ばし）のほとりに、曝（さら）し首（くび）になったと云う事も、あるいは御耳にはいって居りましょう。わたしはあの阿媽港甚内に一方（ひとかた）ならぬ大恩を蒙（こうむ）りました。が、また大恩を蒙っただけに、ただ今では何とも申しようのない、悲しい目にも遇（あ）ったのでございます。どうかその仔細（しさい）を御聞きの上、罪びと北条屋弥三右衛門（ほうじょうややそうえもん）にも、天帝の御愛憐を御祈り下さい。
ちょうど今から二年ばかり以前の、冬の事でございます。ずっとしけばかり続いたために、持ち船の北条丸（ほうじょうまる）は沈みますし、抛（な）げ銀は皆倒れますし、――それやこれやの重なった揚句（あげく）、北条屋一家は分散のほかに、仕方のない羽目（はめ）になってしまいました。御承知の通り町人には取引き先はございましても、友だちと申すものはございません。こうなればもう我々の家業は、うず潮に吸われた大船（おおぶね）も同様、まっ逆（さか）さまに奈落（ならく）の底へ、落ちこむばかりなのでございます。するとある夜、――今でもこの夜（よ）の事は忘れません。ある凩（こがらし）の烈しい夜（よる）でございまし

たが、わたし共夫婦は御存知の囲（かこ）いに、夜の更（ふ）けるのも知らず話して居りました。そこへ突然はいって参ったのは、雲水（うんすい）の姿に南蛮頭巾（なんばんずきん）をかぶった、あの阿媽港甚内（あまかわじんない）でございます。わたしは勿論驚きもすれば、また怒（いか）りも致しました。が、甚内の話を聞いて見ますと、あの男はやはり盗みを働きに、わたしの宅へ忍びこみましたが、茶室には未（いまだ）に火影（ほかげ）ばかりか、人の話し声が聞えている、そこで襖越（ふすまご）しに、覗（のぞ）いて見ると、この北条屋弥三右衛門は、甚内の命を助けた事のある、二十年以前の恩人だったと、こう云う次第ではございませんか？

なるほどそう云われて見れば、かれこれ二十年にもなりましょうか、まだわたしが阿媽港（あまかわ）通いの「ふすた」船の船頭を致していた頃、あそこへ船がかりをしている内に、髭（ひげ）さえ碌（ろく）にない日本人を一人、助けてやった事がございます。何でもその時の話では、ふとした酒の上の喧嘩（けんか）から、唐人（とうじん）を一人殺したために、追手（おって）がかかったとか申して居りました。して見ればそれが今日（こんにち）では、あの阿媽港甚内と云う、名代（なだい）の盗人（ぬすびと）になったのでございましょう。わたしはとにかく甚内の言葉も嘘ではない事がわかりましたから、一家のものの寝ているのを幸い、まずその用向きを尋ねて見ました。

すると甚内の申しますには、あの男の力に及ぶ事なら、二十年以前の恩返しに、北条屋の危急を救ってやりたい、差当（さしあた）り入用（いりよう）の金子（きんす）の高は、どのくらいだと尋ねるのでございます。わたしは思わず苦笑（くしょう）致しました。盗人に金を調達して貰う、――それが可笑（おか）しいばかりではございません。いかに阿媽港甚内でも、そう云う金があるくらいならば、何もわざわざわたしの宅へ、盗みにはいるにも当りますまい。しかしその金高（きんだか）を申しますと、甚内は小首（こくび）を傾けながら、今夜の内にはむずかしいが、三日も待てば調達しようと、無造作（むぞうさ）に引き受けたのでございます。が、何しろ入用なのは、六千貫と云う大金でございますから、きっと調達出来るかどうか、当（あ）てになるものではございません。いや、わたしの量見（りょうけん）では、まず賽（さい）の目をたのむよりも、覚束（おぼつか）ないと覚悟をきめていました。

甚内はその夜（よ）わたしの家内に、悠々と茶なぞ立てさせた上、凩（こがらし）の中を帰って行きました。が、その翌日になって見ても、約束の金は届きません。二日目も同様でございました。三日目は、――この日は雪になりましたが、やはり夜（よ）に入ってしまった後（のち）も、何一つ便りはありません。わたしは前に甚内の約束は、当にして居らぬと申し上げました。が、店のものにも暇（ひま）を出さず、成行きに任（まか）せていた所を見ると、それでも幾分か心待ちには、待っていたのでございましょう。また実際三日目の夜（よ）には、囲いの行燈（あんどん）に向っていても、雪折れの音のする度毎に、聞き耳ばかり立てて居りました。

所が三更（さんこう）も過ぎた時分、突然茶室の外（そと）の庭に、何か人の組

み合うらしい物音が聞えるではございませんか？　わたしの心に閃（ひらめ）いたのは、勿論（もちろん）甚内の身の上でございます。もしや捕（と）り手（て）でもかかったのではないか？——わたしは咄嗟（とっさ）にこう思いましたから、庭に向いた障子（しょうじ）を明けるが早いか、行燈（あんどん）の火を掲（かか）げて見ました。雪の深い茶室の前には、大明竹（だいみんちく）の垂れ伏したあたりに、誰か二人掴（つか）み合っている——と思うとその一人は、飛びかかる相手を突き放したなり、庭木の陰（かげ）をくぐるように、たちまち塀の方へ逃げ出しました。雪のはだれる音、塀に攀（よ）じ登る音、——それぎりひっそりしてしまったのは、もうどこか塀（へい）の外へ、無事に落ち延びたのでございましょう。が、突き放された相手の一人は、格別跡を追おうともせず、体の雪を払いながら、静かにわたしの前へ歩み寄りました。

「わたしです。阿媽港甚内（あまかわじんない）ですよ。」

わたしは呆気（あっけ）にとられたまま、甚内の姿を見守りました。甚内は今夜も南蛮頭巾（なんばんずきん）に、袈裟法衣（けさころも）を着ているのでございます。

「いや、とんだ騒（さわ）ぎをしました。誰もあの組打ちの音に、眼を覚さねば仕合せですが。」

甚内は囲（かこ）いへはいると同時に、ちらりと苦笑（くしょう）を洩（も）らしました。

「何、わたしが忍（しの）んで来ると、ちょうど誰かこの床（ゆか）の下へ、這（は）いこもうとするものがあるのです。そこで一つ手捕（てど）りにした上、顔を見てやろうと思ったのですが、とうとう逃げられてしまいました。」

わたしはまださっきの通り、捕り手の心配がございましたから、役人ではないかと尋（たず）ねて見ました。が、甚内は役人どころか、盗人だと申すのでございます。盗人が盗人を捉（とら）えようとした、——このくらい珍しい事はございますまい。今度は甚内よりもわたしの顔に、自然と苦笑が浮びました。しかしそれはともかくも、調達の成否（せいひ）を聞かない内は、わたしの心も安まりません。すると甚内は云わない先に、わたしの心を読んだのでございましょう、悠々と胴巻（どうまき）をほどきながら、炉（ろ）の前へ金包（かねづつ）みを並べました。

「御安心なさい、六千貫の工面（くめん）はつきましたから。——実はもう昨日（きのう）の内に、大抵（たいてい）調達したのですが、まだ二百貫ほど不足でしたから、今夜はそれを持って来ました。どうかこの包みを受け取って下さい。また昨日（きのう）までに集めた金は、あなた方御夫婦も知らない内に、この茶室の床下（ゆかした）へ隠して置きました。大方（おおかた）今夜の盗人のやつも、その金を嗅（か）ぎつけて来たのでしょう。」

わたしは夢でも見ているように、そう云う言葉を聞いていました。盗人に金を施（ほどこ）して貰う、——それはあなたに伺わないでも、確かに善い事ではございますまい。しかし調達が出来るかどうか、半信半疑の境（さかい）にいた時は、善悪も考えずに居りましたし、また今となって見れば、むげに受け取らぬとも申され

ません。しかもその金を受け取らないとなれば、わたしばかりか一家のものも、路頭（ろとう）に迷うのでございます。どうかこの心もちに、せめては御憐憫（ごれんびん）を御加え下さい。わたしはいつか甚内の前に、恭（うやうや）しく両手をついたまま、何も申さずに泣いて居りました。……

その後（のち）わたしは二年の間（あいだ）、甚内の噂（うわさ）を聞かずに居りました。が、とうとう分散もせずに恙（つつが）ないその日を送られるのは、皆甚内の御蔭でございますから、いつでもあの男の仕合せのために、人知れずおん母「まりや」様へも、祈願（きがん）をこめていたのでございます。ところがどうでございましょう、この頃往来（おうらい）の話を聞けば、阿媽港甚内（あまかわじんない）は御召捕（おめしと）りの上、戻（もど）り橋（ばし）に首を曝（さら）していると、こう申すではございませんか？　わたくしは驚きも致しました。人知れず涙も落しました。しかし積悪の報（むくい）と思えば、これも致し方はございますまい。いや、むしろこの永年、天罰も受けずに居りましたのは、不思議だったくらいでございます。が、せめてもの恩返しに、陰（かげ）ながら回向（えこう）をしてやりたい。——こう思ったものでございますから、わたしは今日（きょう）伴（とも）もつれずに、早速一条戻り橋へ、その曝し首を見に参りました。

戻り橋のほとりへ参りますと、もうその首を曝した前には、大勢（おおぜい）人がたかって居ります。罪状を記（しる）した白木（しらき）の札（ふだ）、首の番をする下役人（したやくにん）——それはいつもと変りません。が、三本組み合せた、青竹の上に載せてある首は、——ああ、そのむごたらしい血まみれの首は、どうしたと云うのでございましょう？　わたしは騒々（そうぞう）しい人だかりの中に、蒼（あお）ざめた首を見るが早いか、思わず立ちすくんでしまいました。この首はあの男ではございません。阿媽港甚内の首ではございません。この太い眉（まゆ）、この突き出た頬（ほお）、この眉間（みけん）の刀創（かたなきず）、——何一つ甚内には似て居りません。しかし、——わたしは突然日の光も、わたしのまわりの人だかりも、竹の上に載せた曝（さら）し首も、皆どこか遠い世界へ、流れてしまったかと思うくらい、烈しい驚きに襲われました。この首は甚内ではございません。わたしの首でございます。二十年以前のわたし、——ちょうど甚内の命を助けた、その頃のわたしでございます。「弥三郎（やさぶろう）！」——わたしは舌さえ動かせたなら、こう叫んでいたかも知れません。が、声を揚げるどころかわたしの体は瘧（おこり）を病んだように、震（ふる）えているばかりでございました。

弥三郎！　わたしはただ幻のように、倅（せがれ）の曝し首を眺めました。首はやや仰向（あおむ）いたまま半ば開（ひら）いた（まぶた）の下から、じっとわたしを見守って居ります。これはどうした訣（わけ）でございましょう？　倅は何かの間違いから、甚内と思われたのでございましょうか？　しかし御吟味（ごぎんみ）も受けたとすれば、そう云う間違いは起りますまい。それとも阿媽港甚内というのは、倅だったのでございましょうか？　わたしの宅へ来た贋雲水（にせうんすい）は、誰か甚内の名前を仮りた、別人だったのでございましょうか？　いや、そんな

筈はございません。三日と云う日限（にちげん）を一日も違（たが）えず、六千貫の金を工面（くめん）するものは、この広い日本の国にも、甚内のほかに誰が居りましょう？　して見ると、――その時わたしの心の中には、二年以前雪の降った夜（よ）、甚内と庭に争っていた、誰とも知らぬ男の姿が、急にはっきり浮んで参りました。あの男は誰だったのでございましょう？　もしや倅ではございますまいか？　そう云えばあの男の姿かたちは、ちらりと一目見ただけでも、どうやら倅の弥三郎に、似ていたようでもございます。しかしこれはわたし一人の、心の迷いでございましょうか？　もし倅だったとすれば、――わたしは夢の覚めたように、しけじけ首を眺めました。するとその紫ばんだ、妙に緊（しま）りのない唇（くちびる）には、何か微笑（ほほえみ）に近い物が、ほんのり残っているのでございます。

曝（さら）し首に微笑が残っている、――あなたはそんな事を御聞きになると、御哂（おわら）いになるかも知れません。わたしさえそれに気のついた時には、眼のせいかとも思いました。が、何度見直しても、その干（ひ）からびた唇には、確かに微笑らしい明（あかる）みが、漂（ただよ）っているのでございます。わたしはこの不思議な微笑に、永い間（あいだ）見入って居りました。と、いつかわたしの顔にも、やはり微笑が浮んで参りました。しかし微笑が浮ぶと同時に、眼には自然と熱い涙も、にじみ出して来たのでございます。

「お父（とう）さん、勘忍（かんにん）して下さい。――」

その微笑は無言の内に、こう申していたのでございます。

「お父さん。不孝の罪は勘忍して下さい。わたしは二年以前の雪の夜（よる）、勘当（かんどう）の御詫（おわ）びがしたいばかりに、そっと家（うち）へ忍（しの）んで行きました。昼間は店のものに見られるのさえ、恥（はずか）しいなりをしていましたから、わざわざ夜（よ）の更（ふ）けるのを待った上、お父さんの寝間（ねま）の戸を叩（たた）いても、御眼にかかるつもりでいたのです。ところがふと囲（かこ）いの障子に、火影（ほかげ）のさしているのを幸い、そこへ怯（お）ず怯（お）ず行きかけると、いきなり誰か後（うしろ）から、言葉もかけずに組つきました。

「お父さん。それから先はどうなったか、あなたの知っている通りです。わたしは余り不意だったため、お父さんの姿を見るが早いか、相手の曲者（くせもの）を突き放したなり、高塀（たかべい）の外へ逃げてしまいました。が、雪明（ゆきあか）りに見た相手の姿は、不思議にも雲水（うんすい）のようでしたから、誰も追う者のないのを確かめた後（のち）、もう一度あの茶室の外へ、大胆（だいたん）にも忍んで行ったのです。わたしは囲いの障子越しに、一切（いっさい）の話を立ち聞きました。

「お父さん。北条屋（ほうじょうや）を救った甚内（じんない）は、わたしたち一家の恩人です。わたしは甚内の身に危急（ききゅう）があれば、たとえ命は抛（なげう）っても、恩に報いたいと決心しました。またこの恩を返す事は、勘当を受けた浮浪人（ふろうにん）のわたしでなければ出来ますまい。わたしはこの二年間、そう云う機会を待っていました。そうして、――その機会が来たのです。どうか不

孝の罪は勘忍して下さい。わたしは極道（ごくどう）に生れましたが、一家の大恩だけは返しました。それがせめてもの心やりです。……」

わたしは宅へ帰る途中も、同時に泣いたり笑ったりしながら、倅（せがれ）のけなげさを褒（ほ）めてやりました。あなたは御存知になりますまいが、倅の弥三郎（やさぶろう）もわたしと同様、御宗門（ごしゅうもん）に帰依（きえ）して居りましたから、もとは「ぽうろ」と云う名前さえも、頂いて居ったものでございます。しかし、——しかし倅も不運なやつでございました。いや、倅ばかりではございません。わたしもあの阿媽港甚内（あまかわじんない）に一家の没落さえ救われなければ、こんな嘆きは致しますまいに。いくら未練（みれん）だと思いましても、こればかりは切（せつ）のうございます。分散せずにいた方が好（よ）いか、倅を殺さずに置いた方が好いか、——（突然苦しそうに）どうかわたしを御救い下さい。わたしはこのまま生きていれば、大恩人の甚内を憎むようになるかも知れません。……（永い間（あいだ）の歔欷（すすりなき））

「ぽうろ」弥三郎の話

ああ、おん母「まりや」様！　わたしは夜（よ）が明け次第、首を打たれる事になっています。わたしの首は地に落ちても、わたしの魂（たましい）は小鳥のように、あなたの御側へ飛んで行くでしょう。いや、悪事ばかり働いたわたしは、「はらいそ」（天国）の荘厳（しょうごん）を拝する代りに、恐しい「いんへるの」（地獄）の猛火の底へ、逆落（さかおと）しになるかも知れません。しかしわたしは満足です。わたしの心には二十年来、このくらい嬉しい心もちは、宿った事がないのです。

わたしは北条屋弥三郎（ほうじょうややさぶろう）です。が、わたしの曝（さら）し首（くび）は、阿媽港甚内（あまかわじんない）と呼ばれるでしょう。わたしがあの阿媽港甚内、——これほど愉快（ゆかい）な事があるでしょうか？　阿媽港甚内、——どうです？　好（い）い名前ではありませんか？　わたしはその名前を口にするだけでも、この暗い牢（ろう）の中さえ、天上の薔薇（ばら）や百合（ゆり）の花に、満ち渡るような心もちがします。

忘れもしない二年前（ぜん）の冬、ちょうどある大雪の夜（よる）です。わたしは博奕（ばくち）の元手（もとで）が欲しさに、父の本宅へ忍びこみました。ところがまだ囲いの障子（しょうじ）に、火影（ほかげ）がさしていましたから、そっとそこを窺（うかが）おうとすると、いきなり誰か言葉もかけず、わたしの襟上（えりがみ）を捉（とら）えたものがあります。振り払う、また掴（つか）みかかる、——相手は誰だか知らないのですが、その力の逞（たくま）しい事は、到底ただものとは思われません。のみならず二三度揉（も）み合う内に、茶室の障子が明（あ）いたと思うと、庭へ行燈（あんどん）をさし出したのは、紛（まぎ）れもない父の弥三右衛門（やそうえもん）です。わたしは一生懸命に、掴（つか）まれた胸倉（むなぐら）を振り切りながら、高塀の外へ逃げ出しました。

しかし半町（はんちょう）ほど逃げ延びると、わたしはある軒下（のきした）に隠れながら、往来の前後を見廻しました。往来には夜目にも白々（しろじろ）と、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時々雪煙りが揚（あが）るほかには、どこにも動いているものは見えません。相手は諦（あきら）めてしまったのか、もう追いかけても来ないようです。が、あの男は何ものでしょう？　咄嗟（とっさ）の間（あいだ）に見た所では、確かに僧形（そうぎょう）をしていました。が、さっきの腕の強さを見れば、――殊に兵法にも精（くわ）しいのを見れば、世の常の坊主ではありますまい。第一こう云う大雪の夜（よ）に、庭先へ誰か坊主（ぼうず）が来ている、――それが不思議ではありませんか？　わたしはしばらく思案した後（のち）、たとい危（あぶな）い芸当にしても、とにかくもう一度茶室の外へ、忍び寄る事に決心しました。

それから一時（いっとき）ばかりたった頃（ころ）です。あの怪しい行脚（あんぎゃ）の坊主（ぼうず）は、ちょうど雪の止んだのを幸い、小川通（おがわどお）りを下（くだ）って行きました。これが阿媽港甚内（あまかわじんない）なのです。侍（さむらい）、連歌師（れんがし）、町人、虚無僧（こむそう）、――何にでも姿を変えると云う、洛中（らくちゅう）に名高い盗人（ぬすびと）なのです。わたしは後（あと）から見え隠れに甚内の跡をつけて行きました。その時ほど妙に嬉しかった事は、一度もなかったのに違いありません。阿媽港甚内！　阿媽港甚内！　わたしはどのくらい夢の中（うち）にも、あの男の姿を慕っていたでしょう。殺生関白（せっしょうかんぱく）の太刀（たち）を盗んだのも甚内です。沙室屋（しゃむろや）の珊瑚樹（さんごじゅ）を詐（かた）ったのも甚内です。備前宰相（びぜんさいしょう）の伽羅（きゃら）を切ったのも、甲比丹（カピタン）「ぺれいら」の時計を奪ったのも、一夜（いちや）に五つの土蔵を破ったのも、八人の参河侍（みかわざむらい）を斬り倒したのも、――そのほか末代にも伝わるような、稀有（けう）の悪事を働いたのは、いつでも阿媽港甚内（あまかわじんない）です。その甚内は今わたしの前に、網代（あじろ）の笠を傾けながら、薄明るい雪路を歩いている。――こう云う姿を眺められるのは、それだけでも仕合せではありませんか？　が、わたしはこの上にも、もっと仕合せになりたかったのです。

わたしは浄厳寺（じょうごんじ）の裏へ来ると、一散（いっさん）に甚内へ追いつきました。ここはずっと町家（ちょうか）のない土塀（どべい）続きになっていますから、たとい昼でも人目を避けるには、一番御誂（おあつら）えの場所なのですが、甚内はわたしを見ても、格別驚いた気色（けしき）は見せず、静かにそこへ足を止めました。しかも杖（つえ）をついたなり、わたしの言葉を待つように、一言（ひとこと）も口を利（き）かないのです。わたしは実際恐る恐る、甚内の前に手をつきました。しかしその落着いた顔を見ると、思うように声さえ出て来ません。

「どうか失礼は御免下さい。わたしは北条屋弥三右衛門（ほうじょうややそうえもん）の倅（せがれ）弥三郎（やさぶろう）と申すものです。――」

わたしは顔を火照（ほて）らせながら、やっとこう口を切りました。

「実は少し御願いがあって、あなたの跡を慕（した）って来たのですが、……」

甚内はただ頷（うなず）きました。それだけでも気の小さいわたしには、どのくらい難有（ありがた）い気がしたでしょう。わたしは勇気も出て来ましたから、やはり雪の中に手をついたなり、父の勘当（かんどう）を受けている事、今はあぶれ

ものの仲間にはいっている事、今夜父の家（うち）へ盗みにはいった所が、計（はか）らず甚内にめぐり合った事、なおまた父と甚内との密談も一つ残らず聞いた事、——そんな事を手短（てみじか）に話しました。が、甚内は不相変（あいかわらず）、黙然（もくねん）と口を噤（つぐ）んだまま、冷やかにわたしを見ているのです。わたしはその話をしてしまうと、一層膝を進ませながら、甚内の顔を覗（のぞ）きこみました。

「北条一家（ほうじょういっか）の蒙（こうむ）った恩は、わたしにもまたかかっています。わたしはその恩を忘れないしるしに、あなたの手下（てした）になる決心をしました。どうかわたしを使って下さい。わたしは盗みも知っています。火をつける術（すべ）も知っています。そのほか一通りの悪事だけは、人に劣（おと）らず知っています。——」

しかし甚内は黙っています。わたしは胸を躍らせながら、いよいよ熱心に説き立てました。

「どうかわたしを使って下さい。わたしは必ず働きます。京、伏見（ふしみ）、堺（さかい）、大阪、——わたしの知らない土地はありません。わたしは一日に十五里歩きます。力も四斗俵（しとびょう）は片手に挙（あが）ります。人も二三人は殺して見ました。どうかわたしを使って下さい。わたしはあなたのためならば、どんな仕事でもして見せます。伏見の城の白孔雀（しろくじゃく）も、盗めと云えば、盗んで来ます。『さん・ふらんしすこ』の寺の鐘楼（しゅろう）も、焼けと云えば焼いて来ます。右大臣家（うだいじんけ）の姫君も、拐（かどわか）せと云えば拐して来ます。奉行の首も取れと云えば、——」

わたしはこう云いかけた時、いきなり雪の中へ蹴倒（けたお）されました。

「莫迦（ばか）め！」

甚内（じんない）は一声叱ったまま、元の通り歩いて行きそうにします。わたしはほとんど気違いのように法衣（ころも）の裾（すそ）へ縋（すが）りつきました。

「どうかわたしを使って下さい。わたしはどんな場合にも、きっとあなたを離れません。あなたのためには水火にも入ります。あの『えそぽ』の話の獅子王（ししおう）さえ、鼠（ねずみ）に救われるではありませんか？　わたしはその鼠になります。わたしは、——」

「黙れ。甚内は貴様なぞの恩は受けぬ。」

甚内はわたしを振り放すと、もう一度そこへ蹴倒しました。

「白癩（びゃくらい）めが！　親孝行でもしろ！」

わたしは二度目に蹴倒された時、急に口惜（くや）しさがこみ上げて来ました。

「よし！　きっと恩になるな！」

しかし甚内は見返りもせず、さっさと雪路（ゆきみち）を急いで行きます。いつかさし始めた月の光に網代（あじろ）の笠（かさ）を仄（ほの）めかせながら、……それぎりわたしは二年の間（あいだ）、ずっと甚内を見ずにいるのです。（突然笑う）「甚内は貴様なぞの恩は受けぬ」……あの男はこう云いました。しかしわたしは夜（よ）の明け次第、甚内の代りに殺されるのです。

ああ、おん母「まりや様！」わたしはこの二年間、甚内の恩を返したさに、どのくらい苦しんだか知れません。恩を返したさに？——いや、恩と云うよりも、むしろ恨（うらみ）を返したさにです。しかし甚内はどこにいるか？　甚内は何をしているか？——誰にそれがわかりましょう？　第一甚内はどんな男か？——それさえ知っているものはありません。わたしが遇（あ）った贋雲水（にせうんすい）は四十前後の小男です。が、柳町（やなぎまち）の廓（くるわ）にいたのは、まだ三十を越えていない、赧（あか）ら顔に鬚（ひげ）の生えた、浪人だと云うではありませんか？　歌舞伎（かぶき）の小屋を擾（さわ）がしたと云う、腰の曲った紅毛人（こうもうじん）、妙国寺（みょうこくじ）の財宝（ざいほう）を掠（かす）めたと云う、前髪の垂れた若侍、——そう云うのを皆甚内とすれば、あの男の正体（しょうたい）を見分ける事さえ、到底（とうてい）人力には及ばない筈です。そこへわたしは去年の末から、吐血（とけつ）の病に罹（かか）ってしまいました。

どうか恨（うら）みを返してやりたい、——わたしは日毎に痩（や）せ細りながら、その事ばかりを考えていました。するとある夜わたしの心に、突然閃（ひらめ）いた一策があります。「まりや」様！　「まりや」様！　この一策を御教え下すったのは、あなたの御恵みに違いありません。ただわたしの体を捨てる、吐血（とけつ）の病に衰え果てた、骨と皮ばかりの体を捨てる、——それだけの覚悟をしさえすれば、わたしの本望は遂げられるのです。わたしはその夜（よ）嬉しさの余り、いつまでも独り笑いながら、同じ言葉を繰返していました。——「甚内の身代（みがわ）りに首を打たれる。甚内の身代りに首を打たれる。……」

甚内の身代りに首を打たれる——何とすばらしい事ではありませんか？　そうすれば勿論わたしと一しょに、甚内の罪も亡（ほろ）んでしまう。——甚内は広い日本（にっぽん）国中、どこでも大威張（おおいばり）に歩けるのです。その代り（再び笑う）——その代りわたしは一夜の内に、稀代（きだい）の大賊（たいぞく）になれるのです。呂宋助左衛門（るそんすけざえもん）の手代（てだい）だったのも、備前宰相（びぜんさいしょう）の伽羅（きゃら）を切ったのも、利休居士（りきゅうこじ）の友だちになったのも、沙室屋（しゃむろや）の珊瑚樹（さんごじゅ）を詐（かた）ったのも、伏見の城の金蔵（かねぐら）を破ったのも、八人の参河侍（みかわざむらい）を斬り倒したのも、——ありとあらゆる甚内の名誉は、ことごとくわたしに奪われるのです。（三度（さんど）笑う）云わば甚内を助けると同時に、甚内の名前を殺してしまう、一家の恩を返すと同時に、わたしの恨（うら）みも返してしまう、——このくらい愉快な返報（へんぽう）はありません。わたしがその夜（よ）嬉しさの余り、笑い続けたのも当然です。今でも、——この牢（ろう）の中でも、これが笑わずにいられるでしょうか？

わたしはこの策を思いついた後、内裏（だいり）へ盗みにはいりました。宵闇（よいやみ）の夜（よ）の浅い内ですから、御簾（みす）越しに火影（ほかげ）がちらついたり、松の中に花だけ仄（ほの）めいたり、——そんな事も見たように覚えています。が、長い廻廊（かいろう）の屋根から、人気（ひとけ）のない庭へ飛び下りると、たちまち四五人の警護（けいご）の侍に、望みの通り搦（から）められま

した。その時です。わたしを組み伏せた鬚侍（ひげざむらい）は、一生懸命に縄（なわ）をかけながら、「今度こそは甚内を手捕りにしたぞ」と、呟（つぶや）いていたではありませんか？　そうです。阿媽港甚内（あまかわじんない）のほかに、誰が内裏（だいり）なぞへ忍びこみましょう？　わたしはこの言葉を聞くと、必死にもがいている間（あいだ）でも、思わず微笑（びしょう）を洩らしたものです。
「甚内は貴様なぞの恩にはならぬ。」――あの男はこう云いました。しかしわたしは夜（よ）の明け次第、甚内の代りに殺されるのです。何と云う気味（きみ）の好（よ）い面当（つらあ）てでしょう。わたしは首を曝（さら）されたまま、あの男の来るのを待ってやります。甚内はきっとわたしの首に、声のない哄笑（こうしょう）を感ずるでしょう。「どうだ、弥三郎（やさぶろう）の恩返しは？」――その哄笑はこう云うのです。「お前はもう甚内では無い。阿媽港甚内はこの首なのだ、あの天下に噂の高い、日本（にっぽん）第一の大盗人（おおぬすびと）は！」（笑う）ああ、わたしは愉快です。このくらい愉快に思った事は、一生にただ一度です。が、もし父の弥三右衛門（やそうえもん）に、わたしの曝（さら）し首を見られた時には、――（苦しそうに）勘忍して下さい。お父さん！　吐血の病に罹（かか）ったわたしは、たとい首を打たれずとも、三年とは命は続かないのです。どうか不孝は勘忍して下さい、わたしは極道（ごくどう）に生まれましたが、とにかく一家の恩だけは返す事が出来たのですから、……

おおかみと七ひきのこどもやぎ

一

むかし、あるところに、おかあさんのやぎがいました。このおかあさんやぎには、かわいいこどもやぎが七ひきあって、それをかわいがることは、人間のおかあさんが、そのこどもをかわいがるのと、すこしもちがったところはありませんでした。

ある日、おかあさんやぎは、こどもたちのたべものをとりに森まで出かけて行くので、七ひきのこどもやぎをよんで、こういいきかせました。

「おまえたちにいっておくがね、かあさんが森へ行ってくるあいだ、気をつけてよくおるすばんしてね、けっしておおかみをうちへ入れてはならないよ。あいつは、おまえたちのこらず、まるのまんま、それこそ皮も毛もあまさずたべてしまうのだよ。あのわるものは、わからせまいとして、ときどき、すがたをかえてやってくるけれど、なあに、声はしゃがれて、がああごえだし、足はまっ黒だし、すぐと見わけはつくのだからね。」

すると、こどもやぎは、声をそろえて、

「かあさん、だいじょうぶ、あたいたち、よく気をつけて、おるすばんしますから、心配しないで行っておいでなさい。」と、いいました。

そこで、おかあさんやぎは、メエ、メエといって、安心して出かけて行きました。

二

やがて、まもなく、たれか、おもての戸をとんとんたたくものがありました。そうして、「さあ、こどもたち、あけておくれ、おかあさんだよ。めいめいに、いいおみやげをもって来たのだよ。」と、よびました。

でも、こどもやぎは、それがしゃがれた、がああ声なので、すぐおおかみだということがわかりました。そこで、

「あけてやらない。おかあさんじゃないから。おかあさんは、きれいな、いい声してるけれど、おまえはしゃがれっ声（ごえ）のがああ声だもの。おまえはおおかみだい。」と、さけびました。

そこで、おおかみは、荒物屋（あらものや）の店へ出かけて、大きな白（はく）ぼくを一本買って来て、それをたべて、声をよくしました。それからまたもどってきて、戸をたたいて、大きな声で、

「さあ、こどもたち、あけておくれ。おかあさんだよ、みんなにいいものをもって来たのだよ。」と、どなりました。

でも、おおかみはまっ黒な前足を、窓のところにかけていたので、こやぎたちはそれをみつけて、

「あけてはやらない。うちのおかあさんは、おまえのようなまっ黒な足をしていない。おまえはおおかみだい。」と、さけびました。
そこで、おおかみは、パン屋の店へ出かけて、
「けつまづいて足をいためたから、ねり粉をなすっておくれ。」と、いいました。
で、パン屋が、おおかみの前足にねったこなをなすってやりますと、こんどは、粉屋（こなや）へかけつけて行って、
「おい、前足に白いこなをふりかけてくれ。」と、いいました。
「おおかみのやつ、まただれかだますつもりだな。」
そう粉屋はおもって、ぐずぐずしていました。
するとおおかみは、
「すぐしないと、くっちまうぞ。」と、どなりました。
そこで、粉屋はこわくなって、おおかみの前足を白くしてやりました。まあ、こういうところが、人間のだめなところですね。
さて、わるものは、三どめに、やぎのおうちの戸口に立って、とんとん、戸をたたいて、こういいました。
「さあこどもたちや、あけておくれ、おかあさんがかえって来たのだよ、おまえたちめいめいに、森でいいものをみつけて来たのだよ。」
子やぎたちは、声をそろえて、
「さきに足をおみせ、うちのおかあさんだかどうだか、みてやるから。」
そういわれて、おおかみは、前足を窓にのせました。こどもやぎがそれを見ますと、白かったので、おおかみのいうことを、すっかりほんとうにして、戸をあけました。
ところで、はいって来たのはたれでしたろう、おおかみだったではありませんか。
みんな、わあっとおどろいて、ふるえあがって、てんでんにかくれ場所をさがして、かくれようとしました。ひとりは、つくえの下にとびこみました。次は寝床（ねどこ）にはいこみました。三ばんめは、炉（ろ）の中にかくれました。四ばんめは、台所（だいどころ）へにげました。五ばんめは、棚（たな）にあがりました。六ばんめは、洗面（せんめん）だらいの下にもぐりました。七ばんめは、柱時計の箱のなかにかくれました。
ところが、おおかみは、そばからみつけだして、ぞうさなく、ひとりひとり、かたはしからつかまえて、ただひと口に、あんぐりやってしまいました。ただ、大時計の箱のなかにかくれた、いちばん小さな子だけは、みつからずにすみました。さて、たらふくたべたいだけたべて、おなかがくちくなると、おおかみはおもてへにげ出して、木のかげになって、青あおとしているしばの上に、ながながとねそべって、ぐうぐういびきをかきだしました。

三

それから間もなく、おかあさんやぎは、森からかえって来ました。ところで、まあ、おかあさんやぎは、そのときなにを見たでしょう。おもての戸は、いっぱいに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com